

# 自らの力で思いや考えを表現できる国語教室～書くことへの習慣化を～

指定校 2 年次 安曇野市立豊科南中学校 藤村 滉

## (1) 本年度の N I E 活動の概要

本年度、本校が掲げた研究テーマは『「見方・考え方」を働かせた「問い」のある授業』である。互いに授業を見合いながら授業改善ができることを目的とし、本年度の研究グループは、教科ごとではなく、様々な教科、経験もばらばらの教員でグループを編成して授業改善を図っている。グループ内では、昨年につき、N I E 2 年目ということで、書くことへの習慣化と、自分の考えを素直に伝えられる力を育みたいと考えた。そのため、研究授業だけでなく、あらゆる場面で意見交換をしながら授業改善を行うことで、昨年度よりも視点を絞りながら活動することができた。

昨年度、新聞の配置や、ポスターセッション、出前授業をしていただいたことなど、手ごたえを感じた活動は引き続き行いながら、生徒の実態に合わせた授業展開を行った。実践を通して、自分の考えはあるがどう伝えてよいか分からないという困り感をもっていた生徒たちも、段階を経て文章を書く習慣を身につけたことで、今では、新聞記事を読み考えたことを、信濃毎日新聞社から頂いた「斜面の読み書きノート」を活用しながら自らの力で文章に書き表すことができている。

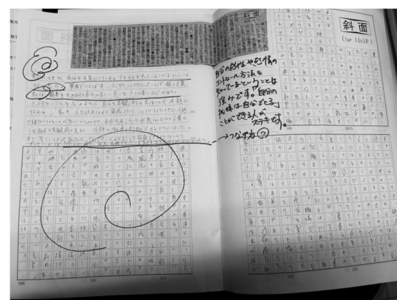


図 1 : 斜面ノートでの自主学习

このように、一つの記事に対しては、自分の思いや考えを文章として述べられるようになった。中には、次の段階として記事と記事とを比較してみたり、自分の意見を補強するための記事を見つけたりと、視野を広げて考えられる生徒も現れた。授業内だけで終わらずに、文章を書く中で感じた、手ごたえや自信を次の段階へとつなげていってほしいと思う。

## (2) 本年度の N I E 活動をはじめる前の状況

本校は、全校生徒 3 4 2 人、1 4 学級（うち特別支援学級 2）であり、対象生徒は 3 年 1 組 2 7 名である。

3 年 1 組の生徒の実態としては、国語の授業内において聞かれたことや問いに対しての意見や考えをもってはいるが、伝えたり言葉にしたりしてみようとするとなかなかうまく表現できずに手が止まる姿が 4 月当初からあった。実際にワークシートなどの内容を見ると、迷いや表現の拙さなど、どう伝えてよいか分からないから書かない、書けない生徒が多くいた。

また、他者に意見を伝えることで、批判や否定をされてしまうのではないかとという恐さから、正解のない問いに対して、正しい答えとは何だろうということを先に求めてしまう姿もあった。

## (3) N I E 活動のねらい（育てたい力）

まず、年度当初に感じた「考えはあるが書くことができない」という、3 年 1 組の生徒の実態から、少しずつ段階を経て、言葉を使って「思いを伝える力」の向上を目指していきたいと考えた。そして、最終的には自らの力で主体的に、自分の思いを素直に伝え、対話し合いながら学習していけるような力を育てられるよう指導した。

段階的な指導の具体的な方法として、はじめに、これまで自分の言葉で考えを書けなかった生徒たちが、いきなり長い文章を書いていくというのには抵抗感があり、難しさを感じるという現状をふまえ「段落構成」に重点を置いた。

続いて、伝えること自体への抵抗感を減らすために、互いの意見を受容し合える関係でなくてはならないと考え、「伝え合い、受け入れ合えるようになる」ことにも重点を置き、単元の言語活動では意見を伝え合う活動を多く取り入れた。

最終的には、具体と抽象、言葉の選び方など、表現の工夫に着手した。

表現の工夫として、身につけたいと考えた力は次の2点である。

一つ目は、「人との比較や文章の長短で、自己の表現について優劣の判断をするのではなく、相手や場面によって、言葉と表現を使い分けるといった『読み手意識』をもちながら自分の思いを伝える力」、二つ目は、「仕上がったものを見合ったときに他者からの評価だけで一喜一憂するのではなく、書き上げるまでに辿った過程に目を向け、自己の学びの良さを受容できる力」である。この二つの視点から、自分の中での向上的変容を自覚できることを目指した。

#### (4) 公開授業以外のNIEの取り組みの状況

##### I【NIE新聞閲覧コーナーの設置】：記事の内容や表現にふれ、活字への関心を高める

昇降口に毎日の朝刊を置く場所を確保し、最大で全6社の記事を置き、新聞の内容を比較できるようにした。新聞の横に付箋と鉛筆も置き、生徒が感想を書いたり意見交換をしたりできるようにしたところ、立ち止まって新聞を読む生徒が多くなった。

また、他の先生方にも協力いただき、コメントを書いてもらうなどの工夫をしたことで、新聞に親しむことができる場所となり、活字への関心が高まった生徒が増えた。また、その日の新聞は図書館に保管しておくことで記事を読み返したいときに、振り返ることができるよう工夫した。



##### II【信濃毎日新聞社の方による出前授業】：新聞記事に対して、自分なりの意見を持ち、伝える

対象クラスである3年1組で、信濃毎日新聞社のNIE担当者の方に出前授業を行っていただいた。新聞の書き方を中心に、新聞がどのようにつくられているかなどをご教授いただいた。真剣な眼差しで新聞記事を見つめる生徒たちは、今までよりもさらに書くことへの興味をもつことができたと感じる。

授業内では、新聞記事に対して、「5W1H」をもとに意見や思いを書く体験をしたことで、構成や展開を意識して文章を書けるようになった生徒が増えた。この出前授業は、今回の単元にもつながる大切なきっかけづくりとなった。



##### III【総合的な学習の時間で壁新聞まとめ】：伝えたい内容の精査・読み手を意識した表現の習得

3学年では、総合的な学習の時間の中の地域学習として、「なんなんタイム（以下NNT）」という時間を設けている。NNTとは、豊科地域を実際に歩いて、地域にある謎や秘密を探るなどフィールドワークをしながら、問題解決をしていく学習のことである。この学習のまとめでは、壁新聞を用いて班ごと文化祭で発表を行った。壁新聞では、文化祭での発表という目的があったことで明確な読み手意識が芽生え、どのような表現の工夫をすると自分の思いが伝わるかを、感じ取りながら学習を進めている姿もあった。

(5) 公開授業などの活動内容

I 単元展開 (全7時間)

時	○学習活動	評価の観点			評価方法
		知	思	態	
1 ・ 2	○教科書「それでも、言葉を」を読み、単元の学習問題を設定する。				☆話を通して、筆者が伝えたいことを自分なりに理解をして、言葉でまとめることができているかワークシートから評価する。
	<b>単元の学習問題：どのように論理の展開や表現の工夫をすると、自分の考えが伝わる批評文が書けるだろうか。</b>				
	○新聞にあるコラムと、鷺田さんが朝日新聞にて書いた文章を参考に、様々なニュースについて自分の考えをもつ。				☆様々な社会問題について、自分なりの考えをもち、立場を明確にしなが、情報を集めることができているかワークシートから評価する。
3 ・ 4 (本時) ・ 5	○自分が取り上げるニュースについて考えることを、『四コマスライド』として、起承転結のあるスライドをつくる。	☆	☆		☆Canva、ロイロノート、Googleスライドなど自分が伝えたい情報に合わせた手段を用いて、具体と抽象が整理されたものをつくられているか、作成したものから評価する。
	最終的に、批評文を書き、まとめたものを全校や先生方に見てもらおうことを目的とすることを伝える。				
	○前時で作成したものを「序論・本論・結論」の形に変えながら、文章にする。また、グループ活動で自分の文章を見直す。(4・5)		☆	☆	☆自分が伝えたいことについて、論理の展開を明確にして表現をしていたり、粘り強く文章に向き合ったり、積極的に意見を交換しているかを、授業内の観察とワークシートから評価する。(4・5)
6 ・ 7	○前時までの内容から、批評文を完成させる。さらに読み合い、意見の妥当性や、表現方法についてグループで検討する。	☆	☆		☆どのような具体例を挙げて、どのように自分なりに理由づけをして、結びつけたのかをまとめたワークシートから評価する。また、グループ活動から自分に不足しているところなどに気づけているか授業内の観察から評価する。
	○単元を振り返り、自分の考えを分かりやすく伝えるためにどのような論理の展開や表現の工夫ができたかをまとめる。		☆	☆	☆友達の文章を読み、物事について自分の思いを伝える際に今後参考にしたり、意識したりしたいことなどをまとめたワークシートから評価する。

## II 授業デザイン

1 単元名	「それでも、言葉を」(光村3)
2 単元ゴール	対象とする事柄の特性や価値などについて、自分なりに論理の展開や表現を工夫しながら評価をし、意見と根拠をもって論じた批評文を書くことができる。
3 本時の主眼	論理の展開を踏まえて『四コマスライド』を作成した生徒が、どのような表現の工夫をすると独自性のある文章になるのかを考える場面で、事前に作成した『四コマスライド』の「転」の部分に注目しながら、自分の伝えたいことを批評文にする活動を通して、意見と根拠をつながけながら自分なりの考えが読み手に伝わるような批評文を書くことができるようになる。
4 本時の位置	全 7 時間扱い中 第 4 時
5 板書計画(手書き可)	<p>序論には何が書かれているか ↓自分の意見や考えの主張(抽象)</p> <p>本論 ↓根拠・具体例・事実に基づく分析・資料等からの引用(具体)</p> <p>結論 ↓主張・伝えたいことをまとめる(抽象)</p> <p>四コマ    起承転結を明確に ← 変身</p> <p>批評文    序論・本論・結論</p> <p>学習課題 どのような表現の工夫をする と独自性のある文章になるだろう。</p> <p>学習課題 作成した『四コマスライド』の「転」の部分に注目しながら、伝えたいことを批評文にしてみよう。</p>
6 補足説明	<p>【本時で期待する生徒の姿】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>起承転結という明確な4場面構成から、序論本論結論という3段構成に変化させて文章を展開していく中で、どのような独自性が生まれるのかということ。</li> <li>「転」を活用しながら、「本論」でテーマと伝えたいことに合わせて、反論・ほかの資料からの引用・具体例などを取り入れて粘り強く学習しているところ。</li> </ul>

### 【単元の評価基準】 〈思・判・表〉 B(1)イ、ウ

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>話や文章の種類とその特徴について理解を深めている。(1)ウ)</p> <p>具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めている。(2)ア)</p>	<p>文章の種類を選択し、多様な読み手を説得できるように論理の展開を考えて、文章の構成を工夫している。(B(1)イ)</p> <p>表現の仕方を考えたり、資料を適切に引用したりして、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるよう工夫している。(B(1)ウ)</p>	<p>論理の展開を考え、粘り強く文章の構成を工夫しながら見通しをもって、自分の考えが伝わるような批評文を書こうとしている。</p>

## (6) 1年間取り組んだ成果と課題

### I 研究授業での生徒の姿から

「四コマスライド」とは、文章の段落構成を分かりやすくするために、今回オリジナルで考えた学習教材である。起承転結をそれぞれ一つのコマにし、自分の意見を端的に書き出すためのものである。文章にしたときに何をどこに組み込むかを捉えやすくするために色で分けたものとなっている。ロイロノートでつくることで、情報の入れ替えを容易に行うことができる利点があった。

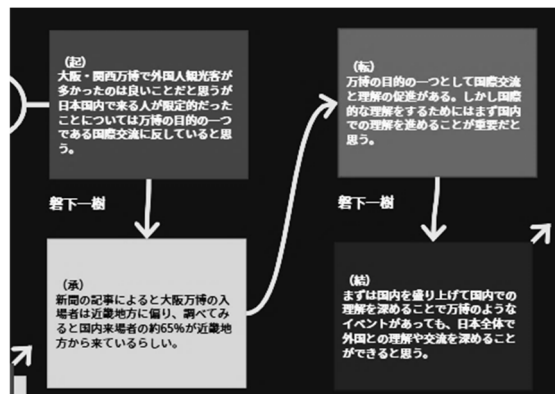


図2：四コマスライド

研究授業では、前時に作成した「四コマスライド」をもとに、文章を書き始めた。はじめの方では、どのように文章にしたらよいかという事が分からず戸惑っている様子もあったが、周囲の友達と相談しながら徐々に文章にしていくことができた。書き上げるうえで、分からないところや悩んでいるところを、周囲と共有するように促したことで、班ごと意欲的に学習することにつながった。

課題は、本時の学習問題にもあるように「独自性」という言葉や「反論」という言葉を用いたことで、生徒たちが、難しく捉えて書き進めることができなかったことだ。反論できない話題に対して、無理やり反論しようとしたり、独自性を出すために難しい言葉を並べたりしていた。教師が意図したのは、伝えたいことに対して自分なりの視点をもってほしいというものだったが、生徒の捉えと違ったため言葉だけが先行していた。

授業の導入場面で、書く内容について復習をしたが、そのことよりも「独自性」とはどのようなにしたらよいかを生徒とともに考えてみたら、生徒たちのなかに豊かな発想が生まれたのかもしれないと考えた。

### II 単元末での生徒の姿から

本単元では、「書くこと」における構成の検討を中心に学習を進めてきた。生徒は、読み手を説得できるように何度も自分の文章と向き合い、論理の展開などを考えて文章の構成を工夫していた。その中でも印象的だったのは、「大阪万博は、日本で開催されたにも関わらず、日本人があまり興味をもたず足を運びなかったのではないか」という記事を読んだ生徒が、記事への賛同だけの文章を書き終わったあとに、電車や飛行機の時刻表を調べていた姿である。

調べていた内容は、最寄り駅と各主要都市からの交通手段、金額、所要時間などである。生徒の意図を聞くと、「記事では、はっきりとした情報が書かれていなかった。賛同したいが情報が足りないので、そもそも万博は足を運びやすかったのか、そうでないのか疑問に思った」と話し、自分の意見に対して裏付けができるように、記事と情報を比べながら批評文を書いていた。

この姿は、新聞記事の批評に付け加え、記事を読み、自分の足りない部分に対して具体的な情報を取り入れて補足し、自らの意見に説得力をもたせている姿だ。こうして仕上がった文章は、研究授業内での問いにもあるように、「独自性」のある文章になっていった。「言葉

による見方・考え方はもちろんのこと、まさに生徒自身が問いを見だし主体的に学んでいく瞬間だった。

単元のまとめとして完成した批評文は、昨年も実践したポスターセッション形式で発表を行った。日本文化の変容について批評文を書いた生徒は、変容していく場合としなかった場合のどちらの観点も結婚式を例に言葉で伝えていた。



これは、批評文を書く際に「意見と根拠をつなげながら自分なりの考えが読み手に伝わる工夫」や「文章の独自性」などを意識して書くことができたことによる効果だと考える。

この発表が、自分の考えや思いを文章にして伝えることの恐さや不安よりも、伝えることは楽しくて面白いのだということに気づき、他者からの評価だけで一喜一憂するのではなく、書き上げるまでに辿った過程に目を向けて、自己の学びの良さを受容できるようにつながってほしいと願っている。

1年間、NIEの活動を通して、国語科が目指している「自らの力で思いや考えを表現できる」姿を、所々で見ることができた。これは、単元でのねらいを達成できた成果である。加えて、普段読む機会の少ない新聞を取り入れたことで、新聞がもつ効果を生徒自身が感じながら学習を進められたことも成果につながった。

作成した批評文は、他学級や先生方からもコメントをもらえるように校内5カ所に展示した。展示したことで、批評文の前で立ち止まって文章を読む生徒が次第に増えた。見ていた生徒に話を聞くと、自分もやってみたいと言っていた生徒もおり、授業学級以外の生徒も表現の仕方や内容について興味を示すようになった。この活動を通して、全校の生徒にも「書くこと」は、楽しいことだという思いを広げることができたと考える。

### Ⅲ おわりに

今後も文章における表現の豊かさと面白さを感じられる授業を行えるよう、この取り組みを次につなげていきたい。

